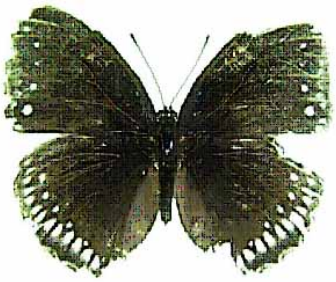
Sep. 1, 1994：石垣島バンナ公園

バンナ公園から名蔵方面へと続く下り舗装道路は精一杯のフルスピードで時間と距離をかせぐ。ぐんぐんとスピードに乗って汗も吹き飛びかけたそのとき、まぎれもないリュウキュウムラサキが左手山側で複数頭戯れているのが目に飛込んで、勢いよく下っていた自転車に急ブレーキをかける。まだバンナ岳の山麓圏内、垂直に近い山肌から突然開けた小さな広場で、これが車だったらちょうど死角となって100%見過ごしてしまうような位置だ。自転車であったからこそ気づいたといえる。誰かの豪邸の庭石にでもなりそうな、そんな大きな石が２つ３つ積み重なった広場で少なくとも３頭のリュウキュウムラサキが追飛している。近づくときれいな♂の方が奥まった林縁に移動し、大型の♀だけが広場にとどまる。この瞬間「生かして持ち帰り、採卵を試みてみよう」そういう思いが頭をかすめ、慎重にこの大きな♀を捕らえる。


石垣バンナ岳 Sep.1,1994 リュウムラ♀

この母蝶の生命力はおどろくばかりに強く、高砂市でパインジュースをうすめて飲ませつつサツマイモへの採卵を試みたところ、自身の羽をボロボロにしながらも実に140数個産卵して、20日以上経った９月22日に力つきるまで本当によく生き抜いてくれた。この卵からは約80頭が立派な成蝶となり、雌雄の比率は約６対４で、よくいわれる通り♀の比率が高い。母チョウはほとんど純粋な大陸型であったが生まれた♀のほとんどが台湾型と大陸型の両方の特徴をあわせもつ個体である。母チョウからの採卵飼育では傷ひとつない超美麗♂標本を得ることができ、容易に八重山へと足を運べない同好の友人に分けてやることもできたわけで、現地でむやみに多くの個体を採る必要は全くない。もちろん現地での自然繁殖継続が最も重要であり、だからこそ現地における♀の捕獲には節度がいる。

石垣飼育 Oct.30,1994 リュウムラ♂

石垣飼育 Oct.31,1994 リュウムラ♀

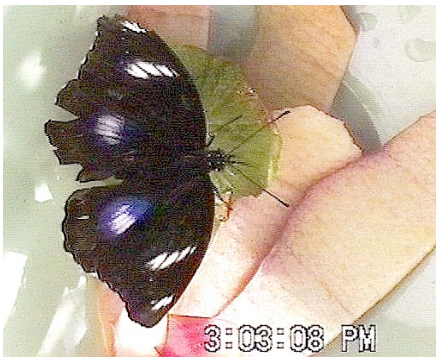
Feb. 10, 1997：飼育の記録

1996年10月11日に与那国島で捕獲したリュウキュウムラサキ母蝶から採卵をして40ほどのサナギに育てて蝶友たちに送り届け、郷里、高知市五台山の牧野植物園温室内で「1996年12月29日現在リュウキュウムラサキ2頭がまだ飛んでいる」との稲垣さんからの年賀状をいただいたりした。高砂で羽化させたものはそのうちに標本とするが、15-20℃の暖房を利かせた部屋で蜂蜜をうすめた液を与えて少しでも長生きさせようと努めた。

ところで、蝶類図鑑としては権威のある北隆館の「原色蝶類検索図鑑(1990)」ではリュウキュウムラサキとヤエヤマムラサキについて『八重山諸島においては冬季にすべて死滅する』とはっきり記載されているが、それにしてはあまりに確実に毎年八重山諸島各地で相当数の発生が繰り返されすぎる、そういう気がしてならない。西は台湾あるいは中国大陸、南は東南アジア、フィリピン諸島などから、決して短くない海洋上を毎年という頻度で、ここまで確実に風に乗って流されてくるだろうか。本当にそうした母蝶からしか新たな世代は発生・繁殖しえないのだろうか。どうも納得し難い。そんな思いから、今回、一部のリュウキュウムラサキを生かしたままで低温環境に放置した場合どの程度耐えられるかという調査観察をしたが、10℃以下で3週間以上生き長らえる個体がいるという予想外の結果である。リンゴ、キウイフルーツ、イチゴ、柿などの果

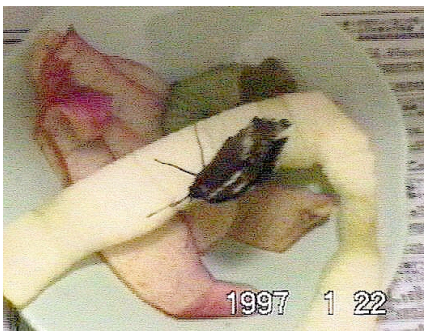
Copyright© 1994- Soft House JUMP. All rights reserved.

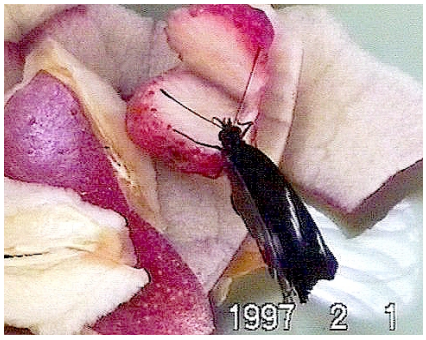
汁を吸わせて時には室温 8.5℃というような環境をしのいで 97 年 2 月 8 日まで生きてくれた。右端に示した映像記録は、まずまず保温性のいい発砲スチロールの中で暖房もせずに保管している 97 年 1 月 20 早朝 6 時前のもので箱内温度は 8.5℃。ただ 1 頭だけとなったチョウは壁面にじっ



と静止して寒さと寂しさに耐えているという感じである。

97 年 1 月 22 日には高砂には珍しく大雪が降り、庭のオガタマノキに自然蛹化していたミカドアゲハを酷ではあるが 1 頭だけ低温影響を調べる目的でそのままとし、残る 4 頭を部屋の中に回収保管した。さすがにリュウキュウムラサキを雪の中にさらすわけにはいかないがあいかわらず室温 10℃以下でもたくましく果物の汁を吸って生き延びてくれた。雪中にさらしたミカドアゲハは室内保管の個体と時を同じくした 5 月にきれいな成蝶となってくれ、このような一時的な低温であれば耐えられることを証明できた。2 月に入ると外気温が 15℃を越えるようになり庭にはヒヨドリやメジロが訪れてくれる。適当なエサが少ないのでオガタマノキの枝の部分にミカンをとりつけておくとすぐに見つけてついばむ姿がかわいい。室内ではリュウキュウムラサキが果汁を吸うだけという楽しみしかない中でたくましい生命力を示してくれたが、さすがに 97 年 2 月 8 日の朝には力尽きていた。これらの低温期飼育事実から、沖縄や八重山諸島では間違いなく成虫越冬している個体がいるとの確証をえた思いがするがいかがであろうか。少なくとも毎年その姿を





見ることのできるリュウキュウムラサキはかなりの確率で成虫越冬をしていることが推定できる。この成虫越冬可能性については、実際に八重山諸島現地で、食草の維持状況も含め長期的な観察をもって事実解明をしたい課題である。

Copyright© 1994- Soft House JUMP. All rights reserved.